様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １３ 日現在

機関番号：１１６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2015
課題番号：２４５２０４９２

研究課題名（和文）方言調査法の方法論的検討－方言調査データの信頼性の測定－

研究課題名（英文）Surveillance study of dialect investigation method; Measurement of reliability of dialect investigation data

研究代表者
半沢　康（HANZAWA, YASUSI）

福島大学・人間発達文化学類・教授

研究者番号：１０２５４８２２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：同一のインフォーマントに同じ方言調査を繰り返し実施した場合，その調査結果はどの程度安定するのだろうか。本研究は方言調査データの「信頼性」(調査データがどの程度安定するのか)を明らかにすることを目的とする。
宮城県角田市と伊具郡丸森町および福島県田村郡小野町において実験的調査を実施し，方言調査データの信頼性を把握した。伊具地方の調査では，多くの項目の安定性(2回の調査の一致度)は80%程度との結果が得られた。他のデータについても今後も分析を進め，結果を公表する予定である。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to grasp the reliability of the dialect investigation data. The experimental investigation of dialects was executed in Kakuda city & Marumori town,Miyagi Prefecture and Ono town,Fukushima Prefecture. The stability of most items is about 80 %. We'll also plan to advance an analysis and publish a result from now on.

研究分野：日本語学

キーワード：宮城県方言　福島県方言　計量分析

1.研究開始当初の背景

方言調査は方言研究の基礎となるデータを収集する活動である。仮にその調査データがインフォーマントの方言実態を正確に反映していないとするならば，その後の分析が意義を失うことは明らかであろう。

方言研究同様，調査によってデータを収集することの多いさまざまな研究分野(心理学，社会学，行動科学など)において，調査法自体の科学的な評価は，よりよいデータを収集するために不可欠の課題とされ，調査方法の妥当性(測定すべき特性を十分に測りうるか)と信頼性(測定事象を適切かつ安定的に測定しうるか)を事前に検討することが当然とされる。調査法自体の検討を目的とした実験的な調査も盛んであり，調査結果の信頼性を検討した論考が各種発表されている[1,2]。

一方，同様に調査を研究の重要な方法とする方言研究領域を省みるに，このような実証データを用いた調査法自体の検討は不十分な状態にあるといってよい。通信調査と面接調査の結果の異同を分析した研究[3]や，質問の方法，インフォーマント，地点といった条件を変更して同一の調査を行い，『日本言語地図』の結果を検証する調査[4]などいくつかの試みは見られるものの，上記のようにそもそも方言調査で用いられるさまざまな調査方法が，どの程度の誤差を含んで方言実態を測定しているのかという科学的な検証は行なわれていない。

研究代表者はかねてこうした調査法の科学的な検討の必要性を論じたことがあるが，当時科学研究費の助成を受けて実施している福島県南相馬市小高区における方言の実時間調査の分析を進める中で，あらためてそうした検討の重要性に思い至ったところである。

上記の問題意識に基づき，2010 年度より科学研究費の助成を受け，本研究を開始した。2010 年度に，南相馬市小高区のほか，福島県川俣町山木屋地区において調査に着手したところ，東日本大震災が発災。小高区および山木屋地区はいずれも東京電力原子力発電所事故の影響で避難区域となってしまい，調査継続が困難となった。そこで「東日本大震災の影響を受けた研究代表者の重複応募制限の特例」を利用し，研究計画の再構築を行なうこととした。

〈文献〉
1 鈴木達三 1968「面接調査における回答の安定性について」『統計数理研究所彙報』16
2 北田淳子 2008「意識調査における回答変動の検討 - 実質的変化と回答のゆれの分離 - 」『行動計量学』35-2
3 小林隆 1988「通信調査法の再評価」『方言研究法の探索』
4 国立国語研究所 1985『方言の諸相』

2.研究の目的

本研究の目的は以下の 2 点である。

(1)方言調査におけるさまざまな調査法を用いた場合，それぞれの調査データがどの程度安定するのかという点を定量的に明らかにし，各調査法の信頼性を表す指標(信頼性係数)を求める。

(2)各調査法によってこれまでに収集した方言調査データ(言語変化の解明を目的とする社会言語学的多人数調査データ)の再分析を行なう。

3.研究の方法

本研究では目的達成のために異なるインフォーマント集団を対象に，①面接質問法，②インタビュー法，③自記式質問紙法という 3 種類の調査法を用いた実験的な調査を実施した。まず各調査法による通常の方言調査を一度実施し，その後一定の間隔をおき，同一のインフォーマントに対し，同一の調査法による 2 回目の調査を実施する。2 回の調査結果を比較し，回答がどの程度安定しているかを把握した。さらにそこで得られた調査法の信頼性に関する情報を活用し，方言変化に関する実時間データおよび見かけ時間データの考察を行なった。

①については宮城県角田市と丸森町および福島県田村郡小野町において調査を実施した。②は被災地を含む県内各地において，③は代表者，分担者，協力者の各勤務校において学生・生徒を対象に実施した。

4.研究成果

(1)上記 3 の①について，2012 年度，2013 年度には宮城県伊具地方において同一インフォーマントを対象とした調査を行い，言語地理学的調査データの信頼性について検討した。第 1 回目の調査は約 50 年前に角田女子高(当時)によって行われた言語地理学調査の実時間追跡調査を企図したもので，過去の調査データとの比較により，当該地域の方言分布の経年比較が可能となるように設計した。図 4.1，4.2 は「蛙」の俚言分布を，LAJ の結果と比較したものである。50 年間で当該地域に混淆形が発生し，広がったことがわかる。

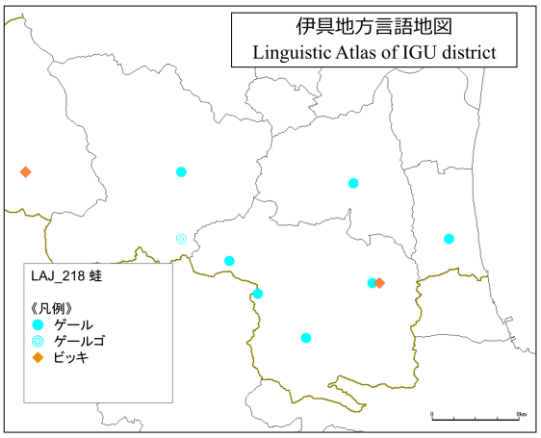

図 4.1 伊具地方言語地図(LAJ_218「蛙」)

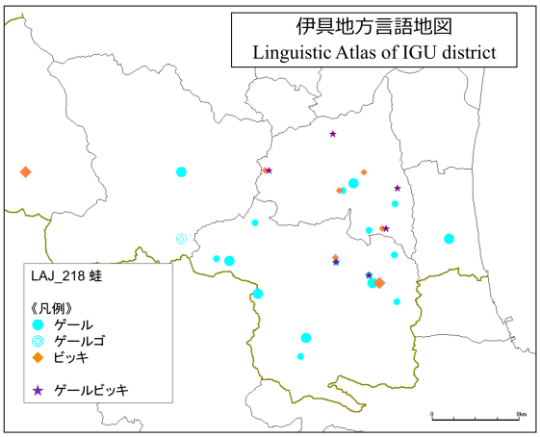

図 4.2 伊具地方言語地図(LAJ_218「蛙」+今回の調査結果」)

また一部の項目については，実験的に 2 回の調査の方法を変更しており，調査方法による回答の変動をみることもできる。図 4.3, 4.4 は 2 回の調査で「誘導語形の提示」を行うかどうかを変えた結果。同一のインフォーマントを対象としても，調査法によって結果が大きく変動することが分かる。実時間比較など，異なる調査によって作成された言語地図を比較する場合に，こうした調査の具体的な方法に十分な配慮が必要となることを示唆するものである。

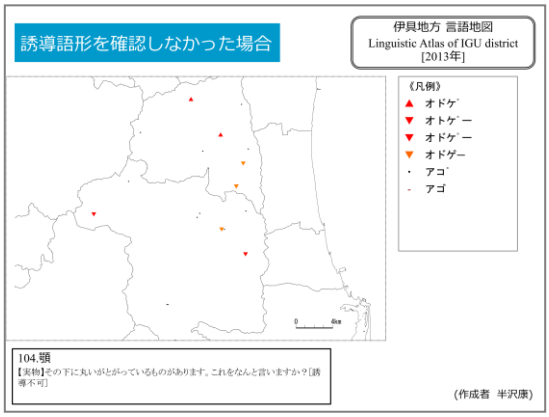

図 4.3 伊具地方言語地図(「顎」;誘導なし)

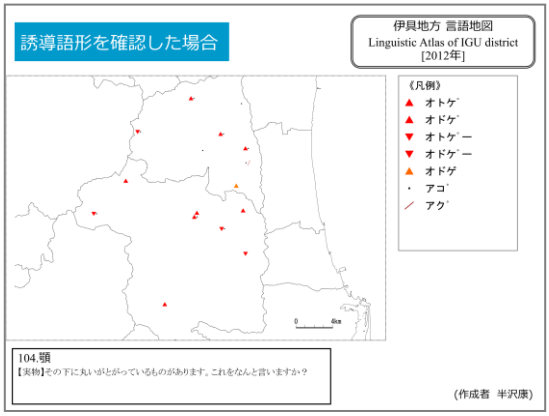

図 4.4 伊具地方言語地図(「顎」;誘導あり)

さて 2 回の調査の回答の一致度については，項目によって差はあるものの，おおよそ 80% 以上の一致率となり，一定の信頼性が確認されている。回答されうる語形数によって回答の安定度が影響を受けること，個人間で回答のばらつきが生じることはあっても全体の回答数は安定すること，多数のインフォーマントに回答された語形の一致率は高くなりやすいことなど，一般の社会調査において確認されるのと同様の傾向が，方言調査データにおいても認められることなどが明らかとなった。

表 4.1 項目別一致率(語彙項目)

項目	基礎	統合
107.唾	0.31	0.31
114.蟷螂	0.75	1.00
122.おはじき	0.75	0.81
133.鉛筆の先が丸くなる	0.50	0.81
136.泥はね	0.81	0.81
138.怠け者	0.25	0.31
平均	0.56	0.68

(2)さらに 25 年度，26 年度には福島県田村郡小野町において同様に 2 回の調査を繰り返し，社会言語学的多人数調査に関する信頼性検討のためのデータセットを得た。(1)伊具地方の調査は高年層のみを対象としたもので対象人数も少ない。共通語化がさらに進行している若い世代にも上記の結果があてはまるものかの検討が必要である。小野町の調査結果は，同様に収集した南相馬市小高区の結果と併せて分析を行っており，今後さらに方言調査データの信頼性について定量的な検討を進める。

なお第 1 回目の調査では，若い世代において新しい方言変化と思しき現象が捉えられたため，1 年間研究期間を延長し，27 年度に中高生を対象とした補充調査を実施した。その結果，すべての項目について，中高生世代で新方言の使用が減少していることが明らかとなった。この結果が共通語化による方言衰退の表れなのか，あるいは「後年採用」によって 1990 年代生まれ世代にも新方言が引き継がれていくのかという点は，実時間追跡調査を実施して確認していく必要がある。

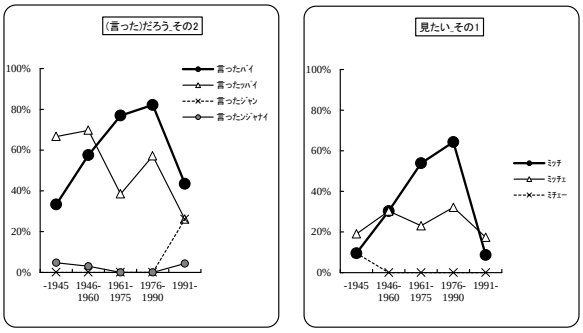

図 4.5 小野町多人数調査結果

5.主な発表論文等
(研究代表者, 研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕（計 5 件）

①小林初夫,「福島県田村郡小野町における中学生・高校生の方言意識」,『福島県田村郡小野町方言の社会言語学的研究調査報告』, pp.40-45, 2016 年, 査読無

②武田拓,「「ホットドッグ」か「アメリカンドッグ」か―新しい方言・気づかない方言の一例として―」,『福島県田村郡小野町方言の社会言語学的研究調査報告』, pp.46-50, 2016 年, 査読無

③本多真史,「福島県田村郡小野町及びその周辺地域における言語伝播の諸相」『福島県田村郡小野町方言の社会言語学的研究調査報告』, pp.51-58, 2016 年, 査読無

④半沢康,「言語地理学調査データの信頼性」,『言文』62, pp.2-20, 2015 年, 査読無

⑤本多真史,「宮城県伊具地方及びその周辺地域における「額」の俚言分布」,『言文』62, pp.21-26, 2015 年, 査読無

〔学会発表〕（計 3 件）

①半沢康,「東北方言の実時間変化」, 福島大学国語教育文化学会 2015 年後期学会, 福島大学(福島県福島市) , 2015 年 12 月 06 日

②半沢康,「グロットグラム調査データの実時間比較」, 言語地理学フォーラム, 国立国語研究所(東京都立川市), 2015 年 03 月 08 日

③半沢康,「東北地方の方言伝播―見かけ時間データを手がかりにして―」,「方言の形成過程解明のための全国方言調査」研究発表会, コラッセふくしま(福島県福島市), 2013 年 12 月 21 日

〔図書〕（計 1 件）

①武田拓編『宮城県伊具地方方言の実時間調査報告』, 私家版, pp.1-97, 2015 年

〔その他〕
ホームページ等
http://www2.educ.fukushima-u.ac.jp/~yhanzawa

6.研究組織
(1)研究代表者
半沢　康(HANZAWA,Yasusi)
福島大学・人間発達文化学類・教授
研究者番号：10254822

(2)研究分担者
武田　拓(TAKEDA,Taku)
仙台高等専門学校・総合科学系・教授
研究者番号：20290695

(3)研究協力者
加藤　正信(KATO,Masanobu)
東北大学・名誉教授

小林　初夫(KOBAYASHI,Hatsuo)
岡山小学校・教諭

本多　真史(HONTA,Masahito)
日大東北高校・講師